



王從心得尊後編  
下

9  
1540  
4





口七 9  
1540  
春 4



下之巻 目録

- 一 鶴の鳥と雀と中よしの不相持の事 四丁
- 一 若ひ時のいぢまりの色情いぢりといふ事 四丁
- 一 余と女をいぢりといふ事 七丁
- 一 女の貴賤をいぢりといふ事 八丁
- 一 西院の河原平藏が娘林大膽大敵の事 十三
- 一 好ふ事といふ横道者の事 又色といふ字の講擇 十六
- 一 此世ふところの化物恐ろしい鬼ありといふ事 十九
- 一 一言も中の町ど。大のらとふんごもふり 二十
- 一 排縮緬虎の皮より恐ろしやといふ狂哥の事 廿一

三編下



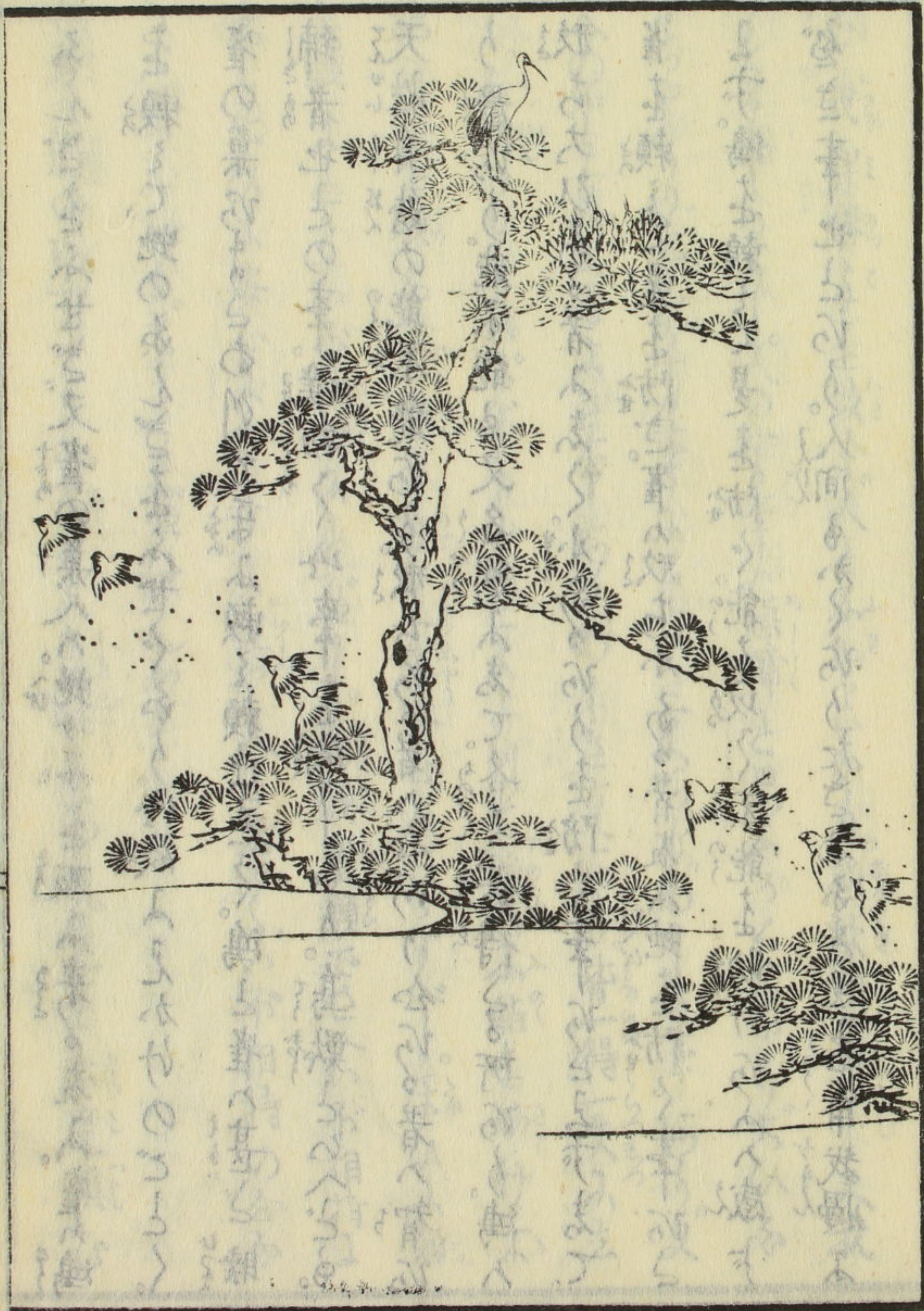
- 一 ひとりぬんの毒ふりてくまなく金と失ひ鼻と失ひ入の夏 廿二
- 一 孔子徳を好む事。色と好むがごとき者とえふといひぬ夏廿四
- 一 廿より三十四五に至る迄折くろるの思案物との夏廿七
- 一 老人心得の事一奇なり 廿八
- 一 正直みかせぐ者へ世界第一の寶との事 廿九
- 一 男ハ女ふむかごとかハ男ふむくまこと世と渡る事 三十四
- 一 三馬か一夜の中みまきたま金をひろいをもろ 三十六
- 一 深川の木場ふ於く大金を拾上り人の事 四十
- 一 後漢の郭巨黄金の釜を布り出せし事 四十二
- 一 女中奉公み出と御主人み仕へる心得の事 四十六

主従心得草 後編下

○日本惣風土記八十四神地名録みいころ。武列葛飾郡下  
 千葉村清瀧山正王寺ハ真言宗みまろ。岡山ハ祥うろろ本  
 本尊ハ阿彌陀佛。御朱印五石のま由緒まま。此寺の境  
 内ハ大樹數多の川く。間近く鴻の巢を啄くみかけく。雛も  
 見へり。下枝みハ雀めかすく止りて雀の巢もよく見へり  
 是を不思議み思ひ鴻の巢の近所み雀のまきハハかの事と  
 住僧み尋孫し。住僧のいころ。雀ハよく鴻の羽虫を取ゆへ  
 み。鴻ハよろこびて雀との中能也。又鴻の巢へハ蟻のつまる  
 物みまろ。鴻の雛みんぎするをみ。鴻より雀めを頼て蟻の



武列<sup>ぶ</sup>下<sup>あ</sup>千<sup>ち</sup>葉<sup>を</sup>村<sup>を</sup>正<sup>を</sup>王<sup>を</sup>寺<sup>を</sup>入<sup>を</sup>松<sup>を</sup>の大<sup>を</sup>不<sup>を</sup>  
ひ<sup>を</sup>ま<sup>を</sup>と<sup>を</sup>り<sup>を</sup>く<sup>を</sup>。鳩<sup>を</sup>の<sup>を</sup>巣<sup>を</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>を</sup>が<sup>を</sup>か<sup>を</sup>く<sup>を</sup>り<sup>を</sup>  
く<sup>を</sup>り<sup>を</sup>。又<sup>を</sup>下<sup>を</sup>る<sup>を</sup>く<sup>を</sup>雀<sup>を</sup>の<sup>を</sup>巣<sup>を</sup>り<sup>を</sup>。さ<sup>を</sup>う<sup>を</sup>と<sup>を</sup>す<sup>を</sup>め<sup>を</sup>  
と<sup>を</sup>ら<sup>を</sup>不<sup>を</sup>ひ<sup>を</sup>ら<sup>を</sup>あり<sup>を</sup>。





ふんぎをふせぎ。又雀の巢へハ蛇ヲ子を取来る。雀ハ鴻  
 を頼て。蛇のふんぎをふせぐ。故ハんかけのごとく。  
 雀の巢のまゝ。わけて。よふ頼て頼まはる。鴻と雀ハ甚ど睦  
 鋪者也との事。僕初く此事を聞かぬ。鳥獸といへども。  
 天性自然の能不能あり。形ちある者ハ。公あり公ある者ハ智  
 り愚あり。能不能も又各別なまて。各其得る所あり。鴻ハ  
 形ち大ひある者なまて。小あるありを防ぐ事あり。よふまて。  
 雀を頼て是を防ぎ。雀ハ形ち小ある者なま。蛇を防ぐ事あり。  
 よふ。鴻を頼て是を防ぐ。能を以て不能を助け。公ハ感  
 念き事也といり。人間もかくありたき。老ふと世を角我慢  
 不

志て我身勝るを致す。人と不和とあり。怨敵のごとく。又我  
 がまじ事ハあり。人のする事ハ忌疎と思ふ。うせあり。大ひあ  
 る所やまり也。よふ事ハよき事あり。あしき事あり。又  
 人のする事ハよき事あり。あしき事あり。皆一得一失なま  
 る。人間の力ハ及びがごとく。ことよよいて。能ハ不能を助け不  
 能ハ能を頼て。災難を直ま一生安公ふらすべし。よふハ頼  
 て頼まはる。いふ相持ふまを盈す。鳥類畜類でさへいふ相持  
 老てよふハ安公よふす。いふ人となま。いふ相持の公  
 きハ鳥もたも。老るる盈けんや  
 ○若き時のなかまより。女くハ色情ふあり。是を急度慎む

三行八行 二編下 四



一。一切の心やまりの是より起る。若き時辛抱せざる。老  
 う後大ふんざる。若し時辛抱せざる。世の不安く  
 来るけき。年寄ては世も出来ず。金限のりからぬと  
 あるべし。すなわち事皆左まへとある。又若し時辛抱す  
 年寄不ど段く仕合よくあり。金限もすくふ。大  
 福長者とある也。若き時辛抱せず。ざらぐす。老  
 う後辛抱さく。かせぐ。万事間遠ひまぐ。福德ハ  
 まぐ。不安もふ。是より。若き時辛抱さてか。が  
 孫を。役立ぬとある。渡世肝要記のり。入八十四内ハ  
 隨分と精を。して金限を。く。四十五成て。氣振

一。若き時と大ひ小遠く。若き時儲けて置孫を。  
 役立が。子後の澤山。よめ取む。我身の入用。  
 一。縁者の愁ひ。悦び。不慮の物入。事お。若  
 ひ内立身出世を。金限を。置孫を。役立ぬとあり。是  
 小相違ふ。又若し内辛抱さく。久く宛あり。世溜る人。年  
 寄。不ど段くと。福德の。人。老後。金持とあり。人。又  
 若し時辛抱せ。久く。借金。を。人。年  
 寄。不ど段く。貪。人。考へ。是より。色欲  
 より。身上。事。若し内。急度。色。を。  
 一。先。色。の。大。災。と。あり。證。の。幽。王。







いひがごとし。万物の下りの下とりぬ。夏の虫のよ下るべし。  
 一念の迷ひより。本心の明德を失ひ。智慧の鏡より。我身を  
 火小こがし。水小ちぢり。かふりき。事よひ。若色欲  
 の心起らむ。我身を不ろ。不す。起りたる。志以て深く。恐  
 まる。急度停止す。急  
 ○命をむ。取も捨るも。色の道え。ほうまき。のた。る。と。か  
 ○孝行天皇君。ふふ。迷ひたる。色の道。の。濁さ。げ。も。已。か。悪性  
 ○了簡詞書。ふい。く。金と女を預か。り。て。も。た。ち。ろ。ぬ。人。で。ふ。く  
 こ。ハ。誠。の。よ。い。人。と。い。ひ。が。こ。古。社。今。来。ふ。迷。ひ。安。き。色。欲。の  
 二道也。儒佛神の教へ。も。更。い。ま。り。ぬ。人。り。其。内。も。

欲心もさ。さ。道も。あ。げ。と。女。色。道。の。迷。ひ。人。多。し。石。將  
 勇士。子。等。も。皆。是。より。敗。れ。と。取。り。人。況。や。其。外。の。取。り。も  
 立。ぬ。者。其。の。猶。く。や。ま。り。事。何。卒。金。と。女。と。を。預。り。て。も。た  
 ち。ろ。ぬ。か。う。か。人。と。あ。る。は。是。を。誠。の。正。直。人。と。い。ふ。早。く。出。世  
 えて。福。徳。圓。満。の。人。と。あ。る。事。眼。前。也。併。し。左。様。か。人。の。至。る。希。也  
 今。の。世。小。金。と。女。を。預。り。て。正。直。小。番。を。ま。る。居。る。人。一。人。も。あ。し  
 金。を。預。け。と。き。ひ。こ。女。を。預。け。と。ま。ら。が。り。へ。ま。る。を。し  
 こ。む。皆。人。が。金。と。女。小。ハ。目。も。か。り。智。恵。も。か。り。正。直。小。猶。か。り。皆  
 盗。人。狼。狂。の。狼。者。を。か。り。也。或。し。油。断。す。べ。か。ら。む。若。今。狼。が。あ。る  
 ろ。を。金。だ。ん。と。い。は。と。く。土。蔵。の。角。と。置。置。し。若。女。が。あ。る



を。脾本へかいつけてをふさぬやうにすむ。或しでも放すと  
災ひあり。全と女を預けたる。楯ふかつ不ふ。一。批よやき前  
を預けとやうな者ふて。いづこにさざふて。かへさぬとあるべし。  
急度氣を舟く。堅く御用心く。

○曰氏文集。古塚の批ふよせく。艶色をいまう。めたり。其内の  
向。古塚の批。妖く。婦人と成。顔色。美。批の女。妖。害。猶。浅  
一。朝。一夕。人の眼を迷らす。女の批の媚をふす。害却て深し。  
目。増。月。長。て。人の心をなぶらす。といへり。此。古塚の批。妖  
く。婦人と成。顔色。甚。く。赤。と。古塚の女。妖。て。人を  
迷らす。害。猶。浅し。唯。ち。人の目を迷らす。をかり。よ。老。て

甚。様。小。障。り。と。あり。女。の。媚。美。ふ。と。其。災。ひ。甚。く。ふ。か  
く。老。て。本。心。を。失。ひ。一。生。を。は。や。ま。す。以。て。貧。乏。難。儀。を。す。也。老。て  
後。十。万。く。や。め。玄。更。甚。か。い。か。一。女。の。媚。を。ふ。す。と。い。ふ。は。う。る。は。し  
さ。姿。を。ふ。し。と。人。よ。え。せ。る。事。也。男。を。と。ら。し。を。せ。く。男。の。思。ひ。を  
か。け。る。や。う。小。老。て。男。を。迷。う。せ。る。事。也。女。の。情。と。老。く。男。よ。い  
女。老。や。と。思。ふ。を。よ。ろ。こ。ぶ。也。況。や。男。が。女。を。か。け。て。拜。む。頼。む。と。い  
へ。甚。く。よ。ろ。こ。ぶ。事。也。文。選。小。士。ひ。の。已。ま。を。老。る。者。の。為。ふ。用  
ひ。ら。も。女。の。已。ま。を。悦。ぶ。者。の。為。ふ。取。ち。を。作。る。と。い。へ。り。女。の。已。ま  
を。よ。い。女。老。や。う。つ。く。老。い。女。老。や。と。慕。ふ。者。の。為。し。猶。く。姿。を  
粧。ひ。其。人。の。悦。ぶ。や。う。に。す。る。の。ハ。男。の。深。く。思。ひ。舟。や。う。に。す。る。事。也。



丈夫も美男も勿論醜き男たり。まことひ慕ふ者ありまこと甚ごよ  
ろことふ也。是ハ女の生も舟ありて。此れハ女も甚ごあやまつる事  
あり。一くあつらふ。いひ尽しがこ

○和論語七ハ幸子のいよく。貴きことふく。賤きことふく。女の何  
ふも差りて。へを得たるさまあつらふ。必ず二をある者とあつらふ。  
恥ろ補事也。あへく昔より。女ををかふき者ありて。男のいよく  
と。いひまらふ。ハ百人ハ百人かぐらう。と。いふ。女も来り。永き浮名  
を流す者也。此趣む。さハ女をつけ。肯を粉ふら。ぎ。肉むら  
折る。あつらふ。名を思ふ。女ハ道を守ら。益き事也。人の我好む  
ふ。あやまつり。ありて。好まざる。方ハあやまつり。ふき者あり。こい

り。人皇百三代後花園院の母の仰せ也。本文みく。大伴と  
たり。母ハ女ハ貴賤とふく。何事も。差出ら。を得ら。凡と  
十の必二をある者也。油断を。又昔より。女をかふき  
者ありて。男より。色く。と。とき。ふけ。を百人ハ百人かぐら。と。こ  
隨ハ。必二ある者也。其時ハ。世上ハ。名を流して。大ハ。ハ。女  
あり。若左様。あり。起り。た。時。必。慎。た。と。ハ。昔。ま。と。ぎ  
身を粉ふ。す。ま。か。と。真。守。り。て。隨。ハ。益。と。と。末。世。の。女  
人。へ。見。見。の。神。詞。也。女。た。る。者。ハ。道。理。の。事。を。老。川。と。深。く  
慎む。と。い。ふ。一。

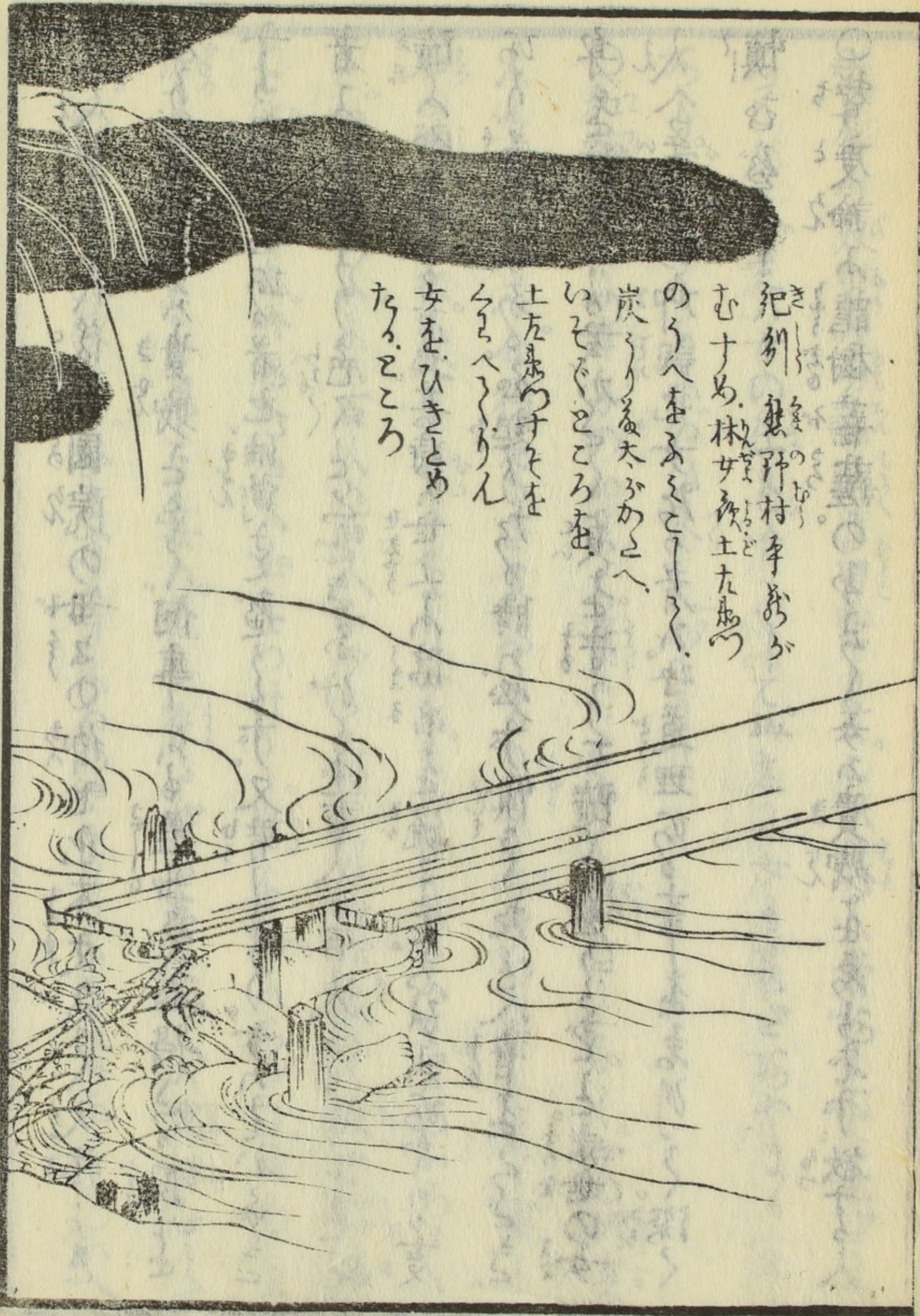
○智度論ハ龍樹菩薩のあつらふ。女ハ貴賤を名ら。を。敬する人





三遊心算二編下

十



紀伊 熊野村 手あが  
 むすめ 柳女 土左衛門  
 のうへをふくこころへ  
 炭くりにる太かこへ  
 いそぐところを  
 土左衛門の子を  
 くらへくりん  
 女をひきとめ  
 たんところ

三遊心算二編下

十



ふ随ふとあり。是ふも相遠ふ。ある女のいづく何族の賤き人でも見ふの男でも我を慕ふ者あるをみればかしく思ひ。夫も随ふと氣入るといへり。然るに女の貴賤を知らず。欲する方へ随ふと相遠ふ。是れ女の悪性也。不貞不義といふべし。たとへばある人ありといへば其人甚道ありとさかばかしく。貞を母りて公をうごかす。是れ女の第一のたふす也。女の貞の一ツさへあるを女の一分の立者也。若し不貞不義にして。又男の上流におもむ。女の下流を好む事ハ。格忘漫筆。後編上。委しけむ。人情を悟る。入用也。内門をよく

治め男女の満訟を變ずる者入。若しを治る。○女の貴賤上下を撰む。欲する者へ。又下流を好むも相遠ふ。又女の悪事ハ。智慧あるも相遠ふ。是れ唐日本をかりし。天竺の女も又かくのごとく。是れ其の法也。八智度論十四卷十八。国王經。王女あり。拘牟頭といふ。其法出入。魚師あり。林波伽といふ。女。賣賣の時。王女の高樓。在在窓の内より見る。紅顔羨。羅桃李の粧。ひを見らる。中々下敷の人と思ふ。天人と見えたり。此れ。是れをえり。想像。深く。後。飲食する事。随ひて。益く思ひ深く。後。飲食する事。



もひことす。段くと疲ふとろへ二重の帯が三重ふまより。三重の  
帯が四重ふまよりさうふふり。既ふ命もひさうさふふり。  
母ハ病ひのさうすをえろふ何う合名のおかぬ類ひをふ。奉の  
次方を尋ねるふかのむをこりふさう。ふまいつぞや王女を見  
くより。哀ふこがきて。ふ忘るひまふ。母友も類ふふり。と  
りふ。ふま王女の奉ふまを所詮叶ひが。こが死ふ死  
するより外ふし。ふま高位高官ふあうを仕接摸摸もあふべけ  
ままふりふま。下賤の身ふまを頼まの猶もふり。とらふ  
まふまかへ川て泣かふま。母親も。是を聞いていふ。ふまふ  
思ひことしていふ。汝ト甚候ふ思ふあふ。ふま一ツの討略をめ

ら一汝トが志しを姫へ通さく。えんと母ハまより。ふづるを求  
め王の宮中へ入く。常ふ肥との奥の肉を王女ふま。是を  
やるふ取す。王女大ひよ。怪ふんで。是を問ふ何ぞ願ひ求る奉  
りや。とりふ。母王女ふま。上るさう。一ツの御願ひあり。何卒左  
右の人を去りせけ。ふ人當ふ以て。上る。とらふ。姫ハ近所  
の女中を二人も残らず。去りせけ。何さうの願ひあるやと尋ね玉  
へむ。ふまふ。一子あり。いつぞや。忘から王女の御姿をえ奉り。文  
より。慕ひ。昼夜忘ま。す。しけ。が。終ふ。ふま。むま。不きて。  
病ひ。とある。ま。わ。す。ま。く。命。尽。ふ。んとす。願。く。く。の。愛。憐  
ま。た。ま。く。女。も。命。の。延。る。さ。う。ふ。や。こ。き。御。こ。と。を。あ。り。ま



御かけ下さるを生く世への御恩ありん。何分も我子の  
命を御助け下さるを。願ひけよを。王女志おろく。思  
案まろくのみひける。汝かおす。此月十五日。鎮守の社内  
みかろき居よ。まろく系諸志て其社の内みて。おろんと。の  
を。母へえひよる。こび早速歸りて。我子。其事を。わたり。汝か  
願ひ叶ひ得たり。今月十五日。ふん夜半より。社の内。忍び居  
ろ。羅の系諸志を相待。と。其を。てを。致しける。已ふ其日  
ふもふりけよを。沐浴志て。新衣志著し。社の内。忍び居  
る。おろみ。班の父大王。お向ひく。の。お。お。願ひ事  
あり。神も諸ろ新らんと欲も。お。お。願ひ。お。大王の

ろく。大ひみよ。系諸志。と。即ち其日。ふも。お。お。王女  
お車。おの。神。社。お。諸ろの。從者。お。お。門を  
開き。せ門の中へ。お。お。入る。事。お。お。王女。唯一人。神の。社。お  
入。お。時。お。此。王城。鎮守の。神。思。惟。す。是。お。お。大  
王。お。社。の。施。主。也。お。お。王女。を。け。が。一。辱。志。お。お。と  
此。お。お。お。お。お。王女。入。て。え。お。お。深  
く。痕。入。く。正。体。お。お。を。以。て。お。お。お。お。是。お。お。の  
う。瓔。珞。の。價。ひ。千。万。兩。お。お。を。遺。志。て。ま。お。お。後。お。此  
男。費。る。事。を。得。る。お。お。の。お。お。王女。の。来。る。を。志。る。  
大事。の。く。喜。路。を。志。る。を。愁。へ。千。悔。万。惱。志。て。お。お。お。



若め云更ふ其かひふし。外目も暗く申かゝると思ふ也。  
 終ふ鐘火内より発ちて焼死す。定を以て知んぬ。女の心入  
 貴賤上下を撰むす。唯欲する者も從ふとりの向ま遠し。  
 此王女もくよくある感。又昔一王女あり。旃陀羅の事も  
 從つて不浄を行す。又仙人の女あり。獅子も隨逐ちて。漏  
 ま把す。種々の因縁悪事を志して強く憎む。愛著す  
 る事ふくことあり。変じて近寄るも恐む慎むべし。  
 ○西院の河原口号傳二ふりて。女入物事やごとく。常ふ三  
 業のふるまひ。形をかよふも其本性入恐るまき。この地  
 夜ふとりのく更たる。男も世合へんこのを恐るまき。入思ふ

孫女。女も思ひよく行合て。各別物す。とき者也。是本性  
 の恐るまき。志かう也。平生入り川かの事ふも。とよや悲し  
 やといへ。一念たりあさす。川てえまを申く。男も叶とぬと  
 びをす。者也。紀列牟婁郡熊野村平藏が娘。林とりの。の  
 あり。西院の河原炭賣藤太も別染。が別とく。久鋪便り  
 もあき。なみ。唯一人藤太が方へ尋孫。日暮て夜の四ッ頃。あ  
 り。春雨のあかり。あ。のら。男も行ぬ。夜の直を。女の一人  
 のとひ。あ。く。ら。と。ぎ。ら。と。で。所。ふ。大。川。あ。つ。つ。か。り。せ。か。  
 たり。水かさ。さ。り。て。橋。の中。打。切。と。り。其。切。向。ふ。と。食  
 の死體と見へ。か。り。入。あ。の。づ。ら。繼。橋。の。ご。と。し。と。ま。一。念



こけしる女の魂ひ死がいの服をふきて向ふの方へ飛とせむ。  
 何うとあらず。裾をらうく引留たり。是をいぶかしく思ひ  
 能く死を死體の口より善物の裾をらうへり。林女は女  
 もさどろろす。もまろけく引ちりし余をどつてか又立歸  
 り。何れも裾をらうへりや。ため志えんと始めのごとく服  
 をふめを口をひきき口をよき口をよき口をよき口をよき口  
 へたり。さもあつんと獨りうあづき西院の河原へといとき  
 ける。裾をらうへり。ためしるおのたまたまる男も及むす。  
 不敵へも恐るる。後、此事を秘すのがりせし流石の  
 藤太も大ひも恐る。是よりを隔たり。おのづから諫まふ

ありけるとかや。若も出家道徳又ハ武士の事あり。道義勇  
 猛の業。女羨談す。さるる女。女のかる事。其分小應せ  
 小却く。謗を招く。墓ひある。墓  
 の日暮み。いと志き入も。こるがりて。足むや。み行墓の野を  
 實みや。二世も三世も。といひか。たる妻。ごも死く。埋  
 塚のふと。り。何れの人。か持。り。夜や。夜一人。通る。ん。み入  
 こく。恐る。志。く。早。初。常。の。人。の。習。也。増。く。女  
 の。露。ち。ぬ。他。國。の。夜。の。一。人。旅。前。後。み。入。ふ。き。水。虫。の。か。り。橋。身  
 を。通。る。も。恐。る。志。き。み。支。を。何。れ。思。ふ。か。み。ま。り。さ。へ。食。の。死  
 が。い。を。ふ。こ。へ。く。通。る。も。大。膽。不。敵。ある。み。又。立。歸。り。て。た。め。し



るる心の内藤太が恐るるゆことより也平生は川かの幸ふ入こと  
とや恐らしやといふけと芸。其服立むかるふ及んで入かきぬり  
よりのおとろし。地震よりもこじし。ひかある男も叶ひかこし。恐るこ  
慎るるく近寄登るるぞ。

○難波記ふ太閤秀吉公十三ヶ條の中ふ。七入の子を持て。女ふを  
をゆるす登るるふとあり。誠みあかり女を浅まらふ名て。己  
まか色欲のゆる内を姿とをかざり他人のゆるる目をを才一として。  
夫とふ入大不實也常ふ入夫とを尻み志き家内ふむびこり。我  
後をといちりしこまり果るる幸受く。夫と入立服まらく追出  
さんと思ふ事度く也亦りといへ芸子供も不便あり。又世上の

外聞ころろし。身上のよらるるもふり。幸く以て堪忍を  
て居るまよきこと入思ひ。うこの空みて目をくす。是等か  
女のたふむむ登き事也。女房の役入善惡をみ。夫と入墮ひ  
た切み仕へく賤婢し。働ふ家僕の妙く入百入ありて。娘の時  
のを持よてくくも登しとあり。是も又を得置登き事也  
○寢ふ又好む事。在の横著者あり其者のゆる事。なきけが。  
おの。後生杯願ふ入ふ。佛や仙人ふふりたふふ。  
霞を食と。木の葉ぐ他と著物を著採入さ。川の灘ひたとへ  
神通を得る。空を飛芸。見物のふら。かる葉をえる。中うで。あしも  
面白事あり。おの。俗情ふま。二十四文の酒。入四十の酒。うまひ



ひとさらよどり  
のむの月よへ  
ホ三味せんがら  
あよとふとめ



いろよまよ  
たる人よふ  
ろつろーい  
タとてめさ  
よも、ちやの  
目うららとま  
ふよとこもふ  
まよまよまよ  
あー

無とおらち  
かさぐらいて  
いまよひこ  
くちよのま  
まらあそ  
ろーと  
こ也

















老く丈夫とをせむる。山の神といふ者也。誠の鬼といふは、  
 ぶ物でふし。誠の鬼といふは、さ川まいゆのやうな角をもちし  
 唐よりこの毛のやうな髪をまじめうぶのやうな髪をま  
 じき出し。ふのりのやうなふんどしをまき。長いものやうな  
 棒をふりまわす。誠の鬼といふは、何サ鬼といふ物かといふ。  
 八百屋見世をまき。さやうな物かといふ。誠の鬼といふは、  
 めんのふんどしをまき。釜川かやのやうなやうな角を何んか  
 一。白ひの油を解く。光澤やうな髪をふりまき。顔まきと  
 細まゆ。八年の既望十六七。八九世の色ざうり。コウくも。氣絶を  
 老く。ふらうつらうの女。酒をのんで。三味線を引奇をまき。といふ人の

精氣をうたひ。後ふら其人を取。一のまきするを。誠の恐る  
 老の大鬼といふ。是は地獄の鬼よりいふ。不どころい。現ふ  
 見。知州で居る。幸ふまき。うと傷りかけ。福ふし。作者も此  
 鬼も取つ。まき。全浪をまき。か取。三三十八んも。神。かこ  
 きて。ふんぎまき。まき。まき。知。居る。其尻尾を借金と。変。志。て。  
 今。不利。が。ら。夫。を。ふ。飯。米。も。小。き。も。衣。服。も。あ。り。一。生。食。多。ふ。り。  
 誠。不。恐。る。老。の。鬼。と。い。ふ。は。緋。ぢ。り。め。ん。の。ふ。ん。ど。し。を。ま。き。女。の。事。也。  
 外。の。ゆ。い。ま。事。も。間。違。ひ。の。あ。り。ま。す。此。鬼。も。取。つ。ま。き。ぬ。ま。き。ふ。す。や。川。柳。が。桑。向  
 一。皆。く。よ。く。兼。知。ま。き。此。鬼。も。取。つ。ま。き。ぬ。ま。き。ふ。す。や。川。柳。が。桑。向  
 ふ。も。緋。縮。緬。虎。の。皮。よ。り。恐。る。一。や。と。ま。き。し。も。間。違。か。一。鹿。の。皮



の憤鼻<sup>うづ</sup>あつと鬼<sup>おに</sup>入<sup>い</sup>つるまの川<sup>がは</sup>に身上<sup>みづかみ</sup>仕舞<sup>し</sup>と者<sup>もの</sup>一人<sup>ひとり</sup>もあらず。ひ  
 ぢりめん<sup>ひぢりめん</sup>の憤鼻<sup>うづ</sup>あつと鬼<sup>おに</sup>入<sup>い</sup>つるまの川<sup>がは</sup>に身上<sup>みづかみ</sup>をまきつと者<sup>もの</sup>の  
 山<sup>やま</sup>布<sup>ふ</sup>とある。虎<sup>こ</sup>の皮<sup>かわ</sup>の二布<sup>ふたふ</sup>あつと鬼<sup>おに</sup>入<sup>い</sup>つるまの川<sup>がは</sup>に裸<sup>はだか</sup>よこま  
 と者<sup>もの</sup>一人<sup>ひとり</sup>もあらず。ひぢりめん<sup>ひぢりめん</sup>の二布<sup>ふたふ</sup>あつと鬼<sup>おに</sup>入<sup>い</sup>つるまの川<sup>がは</sup>に  
 裸<sup>はだか</sup>よこまつと人<sup>ひと</sup>の世<sup>よ</sup>間<sup>ま</sup>は澤<sup>さわ</sup>山<sup>やま</sup>入<sup>い</sup>り。虎<sup>こ</sup>の皮<sup>かわ</sup>のふんどしあつと鬼<sup>おに</sup>入<sup>い</sup>  
 大きよこまつとま終<sup>つひ</sup>入<sup>い</sup>る人<sup>ひと</sup>を取<sup>と</sup>つるまへく。まごか入<sup>い</sup>まごり。全<sup>ぜん</sup>  
 根<sup>ね</sup>を取<sup>と</sup>たり。人<sup>ひと</sup>の身上<sup>みづかみ</sup>をとるまごんよあつと人<sup>ひと</sup>の本<sup>ほん</sup>をまきつと  
 ひぢりめん<sup>ひぢりめん</sup>の禪<sup>ぜん</sup>あつと鬼<sup>おに</sup>入<sup>い</sup>つるまの川<sup>がは</sup>に土<sup>ど</sup>藏<sup>ざう</sup>をうり。株<sup>かぶ</sup>家<sup>か</sup>督<sup>とく</sup>を  
 失<sup>し</sup>ひ。よの身上<sup>みづかみ</sup>を棒<sup>ぼう</sup>よ入<sup>い</sup>りて。其<sup>その</sup>男<sup>おとこ</sup>の形<sup>かたち</sup>方をまきつと妻<sup>さい</sup>子<sup>こ</sup>けん  
 どくを路<sup>ろ</sup>頭<sup>とう</sup>入<sup>い</sup>つるま其<sup>その</sup>身<sup>み</sup>一人<sup>ひとり</sup>のふんぎの身<sup>み</sup>非<sup>ひ</sup>ゆふい。妻<sup>さい</sup>子<sup>こ</sup>けん

どくのおんぎこと。氣<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>千万<sup>まんべん</sup>ふり。虎<sup>こ</sup>の皮<sup>かわ</sup>のふんどしあつと  
 鬼<sup>おに</sup>入<sup>い</sup>つるま入<sup>い</sup>つる。ひぢりめん<sup>ひぢりめん</sup>の三布<sup>さんふ</sup>あつと鬼<sup>おに</sup>入<sup>い</sup>つるま  
 一<sup>ひと</sup>の。かみらまど。近<sup>ちか</sup>寄<sup>よ</sup>入<sup>い</sup>つるま。けいせい<sup>けいせい</sup>の泪<sup>なみだ</sup>で藏<sup>ざう</sup>の屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>か  
 め。とりの登<sup>のぼ</sup>句<sup>く</sup>入<sup>い</sup>相<sup>あ</sup>遠<sup>とほ</sup>か。虎<sup>こ</sup>の皮<sup>かわ</sup>のふんどしあつと鬼<sup>おに</sup>入<sup>い</sup>つるま  
 つるまの川<sup>がは</sup>に地<sup>ち</sup>獄<sup>ごく</sup>へ行<sup>い</sup>き。ひぢりめん<sup>ひぢりめん</sup>の二布<sup>ふたふ</sup>あつと鬼<sup>おに</sup>入<sup>い</sup>つるま  
 川<sup>がは</sup>に座<sup>ざ</sup>鋪<sup>ぽ</sup>へ入<sup>い</sup>る。百<sup>ひゃく</sup>千<sup>せん</sup>  
 万<sup>まん</sup>倍<sup>ばい</sup>の苦<sup>くるしみ</sup>まゝ来<sup>き</sup>るとある。恐<sup>おそ</sup>る心<sup>こころ</sup>懐<sup>なつか</sup>む。ひぢりめん<sup>ひぢりめん</sup>の  
 禪<sup>ぜん</sup>あつと者<sup>もの</sup>一人<sup>ひとり</sup>もあらず。近<sup>ちか</sup>寄<sup>よ</sup>入<sup>い</sup>つるま。又<sup>また</sup>ひぢりめん<sup>ひぢりめん</sup>の丈<sup>さか</sup>長<sup>なが</sup>  
 かけと娘<sup>むすめ</sup>まも。まごり。身<sup>み</sup>ハ又<sup>また</sup>い。若<sup>わか</sup>まごり。何<sup>なに</sup>の  
 何<sup>なに</sup>のかのといひ事<sup>こと</sup>が来<sup>き</sup>る。終<sup>つひ</sup>入<sup>い</sup>る。妻<sup>さい</sup>子<sup>こ</sup>けん。



ひあろうん。いげま維宿廬の類ハ。男ハ大禁物とあるぞ。一。  
 鯉ハ胡柝録ハ焜西凡ハ和申散切きず。一梨子よりハ大毒也。  
 ひぢりめんハ毒ハ班猫よりハ殺生石よりハよ布どひどい  
 毒也。此毒ハちてくまろく。氣を失ひ金を失ひ鼻を失ひふ  
 ぎやくとふゆとる人ヌ。又死したる人もヌ。世ハ恐らまは  
 とりハ。ひぢりめんハ毒ハ氣也。是ハ表へんへる野の命取の大  
 毒ハちてくまろく。人ノ也。又表へんへぬ。あはこうの借金ノ毒  
 ハあてくまろく。一生貧乏ハんぎする人なり。是ハ百千万人ハ  
 まくがどへん。一。こまや恐るや。此するこハ身ノ毛ガ彌立ト。  
 ねハハハハ。まよハ其様ハ怖らまも思ふぬ。ぞハモ二十ハハ。



。花をみるその布とりれうきつ福かりの色よや人迷あそ



三十へんも。羨くまの鬼も取つるまの何とて。無理も酒がまのく  
 貫ひたいといふも也。是でなすごとく。惡性がまのぬ。行末のどふあ  
 るまもかた。大方天竺浪人共あり。と食芝あるべし。どふでも男の  
 惡性者も相違ぬ。男の惡性故も貞女の妻を不儀者もまの  
 事あり。と氣の毒子方也。是も依とく男たる者も。身をよくおこめ  
 と。不埒あきやうふとべし。妾けがらぬ杯あつて致まへくふと。男  
 の身持さへ下しひまも妻女も貞もまの。家へよく治るべし。唯本妻  
 と申す。暮をべし。飛ぶももの神代く。紙びぬ二人三人見むと  
 あり。是もて女房一人の者といふ事をもよくあるべし。かやうふあ  
 くての家へよく治まらぬとあるべし。又上く様方が子孫の爲も妻を

のけりまの論のやあり色欲もよ何て。身を不ろ不すりの  
 古今もかぞへごとく。若色を好むを起らぬ。是色を好むも  
 いらぬ。我身を不ろ不すを起りたりと知りく。急度止む  
 ぬ。我身の災いとある事。を止めざるへ智慧ふし。う。簡  
 一。身知くすと。知例て是非まよ止べし。止さへすと。男一丈  
 福德安心。此上へはるべく。深く考へぬ。是も男をかりの事  
 と思ふ。ぬくすと。女も男と同じ事ふとを。不義不貞。ふま  
 ぬと。ぬく。女の爲も。男も。ぬく。をけをかまこと。世を  
 渡る也。狂ふ。後家なま。若も。男ふ。い。身上仕ま  
 人も。る。の。と。なり。是も。相違ぬ。世間よく。なる。事也



よい年をまゝと後家かくのこころ。况や年若の娘に猶男  
ふだまよまゝとく。擗わうぐいせを引立てて裸ふまゝとく女もあ  
まゝとあり女も男ふをかさまぬやう入す也。男もとんご惡  
人あり。女も油断す也。女中衆急度吟味。男を  
持也。又男のやめ入るじごも。女の孀は花が咲とらん事  
とま。室よりごまをあらさず  
色好む。ふふかへう。道志する人をまゝとるを。人とある也。  
論語二ふ孔子のいさく。吾未だ徳を好む事。色を好むが如  
き者を見ずと。此語四之卷ふも牛なり。重く出と事ハ。誠ふ  
徳を好む人のふきを深くふげきあふよつてあり。註ふいさく

衛の靈公夫人南子を愛まゝく徳を好む玉玉ぬ右入。是た傷ん  
でのもこととあり。色を好むると徳を好む人けく賢人  
君子とありん事。女安かるべし。あるも色を好むが如く。徳  
を好む人あり。中環志く色入命を捨つ人。徳ふ  
力を尽す人さへふきと。あげきあふ古今間遠ひふき調也  
○歌詠百首の中ふの身を捨く。いひ初てえん。たびハ死る命  
と思ひさごめく。と此舟の槎子でハ逢漆く。ふかくふ川と  
とらんふあくま尺目ふんことありて。意あててあふぬ。おま  
まより。ある人の娘ふく。中く及むぬ意ふり。よそふのこ。てや  
かふめん。かつごの。高まの山の峯の白雲とらん意也。雲ふかけ



たりかすそふふとりの事也。世も及む事ふも其見際こ  
 因果果表や叶まぬ道もつひひ出でて又福をあらぬ若しは  
 志ろいろよい返事のあし時入ハ所詮生くる居るも取れど其  
 ふかへ思ひ渡りかろ何でもつひひ出でて又福をあらぬ若しは  
 らまてくる百年日死んで志まらぬかの事一度死を二度死ぬ  
 と思ひ定めろ。命かけぬろふもまやりたのむ事也。何と此  
 位ふふこんで徳を好む者かごさりませうろ。唐も日本も  
 一人もふい。孔子の徳を好む事。色を好むかごとき者をむ見  
 ずと。あげきあふも法衣千万あらずや。此意ハ深くも志まら  
 入もあつむど。又合思ひとりのもあつむず。行思ひの目入るこを

かりの事也。ちろとえり。君の姿が目入る。夫からて不す泪  
 ぶありけり。とのふ奇の通り也。此方でハ首たけ。脊たけ。ふろま  
 不さ其。ごきろでハ。めんぬ女ハ。志まらぬ。外郎かご  
 るいと。おぞげふるけりて。嫌ひあふ。あつむ此方をかろ。志まら  
 ふハ。身の布どをあらぬ。のろまるとえへと。色ハ命を捨てる人  
 身ハ。善事入ハ。かを尽す人も。福徳安んぬ。あき善と志まら  
 身。身を忘る。十重百重も。迷ひける。一重の皮のうけり。きふ  
 老。若きも。若きも。同ト。上皮の色ハ。我身をだ。ぬかま。つ  
 のいろ。うろ。うろ。皮。こ。ま。り。て。世。を。渡。ら。ど。身。を。忘。つ。め。け。り  
 恐。も。恐。る。危。き。ハ。男。女。の。上。皮。の。色。也。此。皮。を。か。り。人。を。あ。わ。ら







つがいの心を至す。極うらむ。この思案を至すべうらむ。若し此  
此事を至す。志行し必ず。短慮起すと極わす。

○若し者勿論老人も。色欲よりいやまる人。然も若し年寄  
入。若し者不と入。思ふぬ者也。唯何とふく。いや思ふぬまじく  
の事。みて深く。好まぬ者也。又好むたり。若し時不と入。面白  
かろう。又役。小立ぬとあるべし。奇みの八十ふ。色欲  
の道。火のへ。袖。けむりた。あり。とあり。是に相違あり。  
夫。又一がい。いひが。き人あり

○年寄。て品こそ。か。ふす。業。入。や。む。む。の。ひ。ま。へ。ん。  
の。霜。か。ま。の。お。き。ふ。草。と。入。お。の。ま。ま。若。女。郎。花。入。尚。か。び。き。は。の。

○年寄。く。身。持。へ。て。女。郎。買。ふ。ふ。う。ま。小。行。人。の。の。ず。き。  
あ。づ。く。ま。小。行。の。相。違。あり。女。郎。ま。が。の。入。ハ。お。と。川。さ。ん。が。来。て。  
金。根。を。若。ひ。ま。せ。う。善。物。を。調。へ。う。其。ひ。ま。せ。う。と。いつ。て。色。事。  
志。ふ。入。と。ハ。い。ぬ。若。金。根。も。ま。ま。善。物。の。ら。ぬ。位。あり。老人。ハ  
いや。お。や。と。い。川。く。居。る。是。も。志。也。又。中。入。色。く。ふ。氣。質。が  
何。川。く。若。ひ。者。と。交。り。若。ひ。氣。で。居。る。人。あり。是。入。あ。ら。し。か。ら  
す。却。く。だ。ま。さ。ま。笑。ま。さ。る。事。あり。年。寄。ハ。年。寄。の。風。は。は。  
若。く。ん。せ。る。入。及。む。ぬ。お。ま。ま。さ。い。ハ。ろ。ろ。隨。分。と。氣。を。存  
く。行。義。よ。く。す。留。し。老人。公。得。の。奇。み  
○人の。為。よ。き。事。一。何。く。バ。諷。言。で。い。へ。く。き。か。せ。よ。老。が。身。の。や。く



○老人の免やせん命と男の問ふ。ちや日入くまると。いふ死るぞ  
 ○老人の暮ふふぞ。うへう。能勘へ強欲やめう。かう道を見よ  
 ○老人の目等よくまう。勝と見を早くかこめう。世を道るべ  
 ○老人の望をまやめう。一心に後生を願ひ念佛とるへ  
 老人の是等の歌をよく考へう。後生を願ひ念佛を唱ふべ  
 無能上人の和讃。最早日暮の旅の空せ川ふも。そげ息  
 たへを則ちゆい。生まふ。京九重の花の臺。入とりの身の上也。  
 老人の必ず。後生を願ひ念佛を唱ふべ。最早日暮の  
 旅の空とりの身。上をよくまう。極重悪人へ念佛の外。小助  
 かる道ふ。若念佛より外。ふよき道ありとりの人へ佛法の真

儀を心得ぬ人也。經文の見やうを知らぬ人也。經文のえやうを  
 まらぬ人のいふ事。入使う。用のべう。極重悪人無他方便。昨  
 稀彌陀得生極樂の文。よてう。こころ。是は惠心僧都の仰  
 ふまう。少昔問。是を定規とす。此外の人。いふ  
 事。入取へう。む。悪人。凡夫の安くと助る法。念佛より外。いふ  
 とまう。夫。身。清浄。般若の實智。何れ。よく  
 修行する人。いふ。道のり。も。勝。次。成。佛。志。あ。心。  
 無智の悪人。彌陀の本願。念佛より外。小助。かる道。入。ふ。つ。よ。あ  
 一。是。み。よ。り。行。住。坐。臥。念。佛。を。唱。へ。め。念。佛。若。ひ。者。も。唱  
 ふ。念。一。況。や。老。人。の。指。く。唱。へ。め。念。佛。若。ど。大。善。大。功。徳。入



る一とあるを<sup>そと</sup>一<sup>は</sup>夫故弘法大師十無益詠の中第一の一<sup>の</sup>一向<sup>の</sup>  
 南無阿彌陀佛の上<sup>の</sup>へ<sup>し</sup>諸善<sup>の</sup>万行無益<sup>あり</sup>あり<sup>けり</sup>。と此<sup>の</sup>所<sup>に</sup>も  
 一<sup>は</sup>念佛の<sup>の</sup>なりが<sup>と</sup>き<sup>に</sup>事<sup>を</sup>よく<sup>し</sup>て<sup>ま</sup>る<sup>べし</sup>。是<sup>は</sup>現世<sup>の</sup>後生<sup>に</sup>も  
 一<sup>は</sup>大福德を得<sup>る</sup>の道<sup>あり</sup>と<sup>も</sup>老若<sup>の</sup>男女<sup>も</sup>乞ふ<sup>に</sup>よ<sup>う</sup>けて<sup>唱</sup>へ<sup>ら</sup>る<sup>べし</sup>  
 一<sup>は</sup>若<sup>し</sup>時<sup>に</sup>辛抱<sup>を</sup>一<sup>は</sup>家業<sup>を</sup>よく<sup>し</sup>つと<sup>む</sup>る<sup>者</sup>人<sup>は</sup>年寄<sup>不</sup>と<sup>福</sup>徳  
 一<sup>は</sup>圓滿<sup>の人</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>け</sup>る<sup>べし</sup>。一生<sup>安</sup>ふ<sup>く</sup>と<sup>ま</sup>る<sup>べし</sup>。又<sup>若</sup>き<sup>時</sup>辛抱<sup>を</sup>下<sup>す</sup>。  
 一<sup>は</sup>あ<sup>ま</sup>り<sup>け</sup>る<sup>べし</sup>と<sup>も</sup>人<sup>は</sup>年寄<sup>不</sup>と<sup>食</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>け</sup>る<sup>べし</sup>。後<sup>に</sup>人<sup>間</sup>  
 の<sup>仲</sup>向<sup>を</sup>を<sup>ら</sup>ふ<sup>と</sup>く<sup>も</sup>食<sup>と</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>け</sup>る<sup>べし</sup>。大難<sup>儀</sup>を<sup>す</sup>る<sup>人</sup>也<sup>。凶</sup>事<sup>を</sup>知  
 一<sup>は</sup>り<sup>け</sup>る<sup>べし</sup>。辛抱<sup>を</sup>致<sup>し</sup>。家業<sup>を</sup>出<sup>精</sup>を<sup>盡</sup>す<sup>べし</sup>。又<sup>若</sup>し<sup>若</sup>く<sup>も</sup>色<sup>を</sup>好<sup>む</sup>者  
 一<sup>は</sup>天地<sup>を</sup>け<sup>が</sup>す<sup>道</sup>理<sup>あり</sup>。先<sup>に</sup>女<sup>を</sup>傾<sup>城</sup>傾<sup>國</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>べし</sup>。是<sup>は</sup>よ<sup>て</sup>色<sup>欲</sup>の<sup>根</sup>  
根<sup>を</sup>持<sup>つ</sup>る<sup>べし</sup>。是<sup>は</sup>よ<sup>て</sup>色<sup>欲</sup>の<sup>根</sup>を<sup>持</sup>つ<sup>る</sup>べし。

悪事<sup>の</sup>根<sup>を</sup>持<sup>つ</sup>る<sup>べし</sup>。是<sup>は</sup>を<sup>慎</sup>ま<sup>さ</sup>ぶ<sup>る</sup>時<sup>に</sup>國<sup>家</sup>  
 一<sup>は</sup>を<sup>持</sup>つ<sup>る</sup>事<sup>は</sup>一<sup>は</sup>是<sup>は</sup>よ<sup>て</sup>貴<sup>賤</sup>上<sup>下</sup>を<sup>急</sup>度<sup>に</sup>慎<sup>む</sup>べ<sup>し</sup>。  
 一<sup>は</sup>ある<sup>人</sup>の<sup>い</sup>ろ<sup>く</sup>。御<sup>大</sup>名<sup>様</sup>方<sup>も</sup>。色<sup>欲</sup>を<sup>よく</sup>慎<sup>む</sup>。女<sup>と</sup>敷<sup>居</sup>を<sup>隔</sup>  
 一<sup>は</sup>て<sup>暮</sup>一<sup>は</sup>より。御<sup>儉</sup>約<sup>の</sup>ふ<sup>ま</sup>を<sup>出</sup>して<sup>富</sup>殿<sup>に</sup>入<sup>る</sup>食<sup>を</sup>乞<sup>ふ</sup>と<sup>看</sup>板<sup>を</sup>  
 一<sup>は</sup>ろ<sup>つ</sup>み<sup>及</sup>む<sup>す</sup>御<sup>家</sup>に<sup>繁</sup>昌<sup>を</sup>求<sup>む</sup>。御<sup>壽</sup>命<sup>も</sup>長<sup>久</sup>ある<sup>べし</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>べし</sup>  
 一<sup>は</sup>一<sup>は</sup>右<sup>左</sup>振<sup>り</sup>を<sup>盡</sup>す<sup>べし</sup>。大<sup>家</sup>の<sup>衆</sup>に<sup>此</sup>を<sup>考</sup>へ<sup>ら</sup>る<sup>べし</sup>。  
 一<sup>は</sup>初<sup>め</sup>み<sup>ら</sup>る<sup>べし</sup>と<sup>く</sup>色<sup>を</sup>好<sup>む</sup>位<sup>に</sup>。徳<sup>を</sup>好<sup>む</sup>道<sup>を</sup>好<sup>む</sup>者<sup>あり</sup>  
 一<sup>は</sup>何<sup>れ</sup>賢<sup>人</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>べし</sup>。色<sup>を</sup>好<sup>む</sup>位<sup>に</sup>公<sup>が</sup>け<sup>た</sup>ら<sup>ば</sup>聖<sup>人</sup>  
 一<sup>は</sup>の<sup>田</sup>地<sup>も</sup>至<sup>る</sup>べ<sup>し</sup>。一<sup>は</sup>切<sup>の</sup>若<sup>し</sup>氣<sup>色</sup>を<sup>好</sup>む<sup>位</sup>に<sup>正</sup>直<sup>實</sup>体<sup>に</sup>家  
 一<sup>は</sup>業<sup>の</sup>道<sup>を</sup>好<sup>む</sup>べ<sup>し</sup>。福<sup>徳</sup>安<sup>ん</sup>願<sup>ふ</sup>と<sup>も</sup>来<sup>る</sup>べ<sup>し</sup>。是<sup>は</sup>を<sup>識</sup>の<sup>根</sup>

三教心行二編下

三六







樂といふ是より外によき樂をいふべきとある也。聖人賢人  
 とつて外に何ものかありたる事なし。唯正直に其身の勤むべ  
 き事をよく勤めし。其外の事を願ひあらず。唯野によく  
 公を落舟く。人無礼をせず。道よむがれし事せず。  
 唯善事を志す。暮しあひの聖人君子也。何ものかありたる人あり  
 らむ。無理の幸ひを願はず。無理に高位高官を願はず。樂を  
 求むせず。唯律儀正直に暮しを樂むと志す。今日を無憂  
 みるるを志す。大安樂と志す。何ものかありたるや。色事をす  
 るが樂をいふし。未だ大苦勞とある。賢人の受てせざる  
 所也。唯小人愚者の好む所也。今日王法をよく守り善事をして、

ろくす不どよき事ハかーとある也。一  
 悟窓漫筆後篇上より。老聃聖人とく。別四目兩口は  
 あく。唯心得のよき人をいふ也。別多般はあく。心得  
 のよき人の立身出世をさす也。天下を治む也。心得の悪  
 雑人の身を亡不し天下をも亡不すべし。桀紂幽厲の類は不  
 得至極の人也。さきハ聖人の經典も諸子百家の書も皆心得を  
 よくする爲の道具也。又深入り深入り性命の奥を論ず  
 るも。身心の益あり。身心の益あけを治國平天下の大道  
 みるるが也。是より外に書よき。替者の智慧  
 をかりて。心得をよく志す。無理せず。無理の事申道のよき所



を通りぬるを。又ひまら奥深き事を知るも益あり  
 ○正直律儀しやうじきりちぎみかせぐ人の世鬼せうじん第一の實也。不實不埒者ふじつふらちの世鬼せうじん第一のすたり物也。不埒者ふらちがゆゑに家をすべり一家一門いつけの大難おほいを  
 かけ 御上みかみの御苦勞みごらうもたへぬ也。誠まことに世鬼せうじんの惡あくたむ者深ふかく  
 りて。安やすかしくす。世鬼せうじん第一の實也。富貴自在ふきざい安やすかしく此人こじんは  
 衣服いふく家宅かたくをかざりて。福徳ふくとくゆうきい物も  
 好このまふまろく自然しぜんと天あまより與あたへぬ。天あまより受うくる處ところの福徳ふくとくの  
 こと誠まことの樂たのしみ也。君子くんしは此樂こゝろを願ねがふ事也。此道理こゝろはうらうら者  
 なる所ところはうらうら者の智ち者しやのこゝろ也。實まことに此道理こゝろは

事ことをよく志こころす。身みを慎しんむ。一家一門いつけの頭あたまとあるべし。よき  
 男おとこよき女むすめといふは男おとこぶり女むすめぶりのよきをいふ事也。我われつとむべき  
 事ことをよくつとめよ。公こう志こころけいふ奢おごりたる事ことをせず。物事ものごと  
 やらうか入いる志こころ。人ひとといふそまらず。虚儀うそぎをいふ事こと。正直しやうじき不ふ精せい  
 むるをよき男おとこよき女むすめといふ事也。何事なにごとよき男おとこよき女むすめといふ心こころ  
 の羞はにかむより。公こうのよき入いる事こと。恵めぐみ方かた果報くわくぱうも。高たかきおたふく  
 若わか又また家業かごう不ふ精せいみ。身み介け不相應ふさうおうのおどりを致いたす。山事やまごとをた  
 らしむ人の難儀なんぎをかまはず。已おのれをうらやまひ事ことせん。人ひとの大おほ  
 惡あく人にん也。不ふ人情にんじやう淺あは智ち惠ゑの人ひと也。福徳ふくとく安やすかしく。未まだ大おほ  
 美うつくする人也。用もち公こう志こころす。近寄ちか寄りを大おほ難題なんだいを



引受る幸あり恐るを  
 ○骨不林かるまど皮うこみ入誰たれも迷まよつらん義人がいにんとらんも皮かわのまどあり  
 皮かわみこそ男おとこ女めづの差別しやべつあり骨こつみ入かろ人ひと取とりもふ  
 ○うこ皮かわをぬりてアアと膿うみと血ちの義女がいにも醜女みにくいも同じおなじにまど  
 此三首の歌をよく悟さとりて色いろ幸さいなりとさる馬ま鹿かく  
 物もの入いり夫つま右みぎ九想くじう詩しも男おとこ女めづの婦つま樂らくハ互たがひ入臭くさ穢せを抱かかく  
 といへり是こゝも向むか遠とほふ至いたりてきこふき所ところを至いたりてうへ  
 志こゝろか入いり思おもひ執と心こゝろも是こゝも不ふどの大おほ迷まよひ入いるべし人ひと々々考かへ  
 めん歌うた入いり戀こゝろとらん其その源もとをたけぬまどそとてあふの二ふたつあり  
 けりと可た圓まる如ごと上の歌うた入いり骨こつをかむ夫つまよりも猶なほはさしやあのが

血ち液えきをまぶるなりたるまむとあり是こゝ等の道理どうりをよくあけりて  
 まり色いろ欲よくま好このむべし今いまの小せう樂らく入いり迷まよひり後のちの大おほ苦くを思おもつ  
 め入いりまり智ち恵えふりとらん佛ぶつ教きやう入いり薄うす皮かわ不ふ淨じやうを覆おほひ  
 り身みの穢せ且かつま見みへるまむとあり此こゝも入いり薄うす皮かわ一ひと重とへを以もつ  
 り不ふ淨じやうまかくまむとあり是こゝも入いり薄うす皮かわ一ひと重とへを以もつ  
 り不ふ淨じやうまかくまむとあり是こゝも入いり薄うす皮かわ一ひと重とへを以もつ  
 り不ふ淨じやうまかくまむとあり是こゝも入いり薄うす皮かわ一ひと重とへを以もつ  
 淨じやうを盛もつるまどと至いたりてきこふ佛ぶつ菩ぼ薩ざつハ勿な論ろん智ち者しや入い  
 臭くさ皮かわ囊のうとらん大おほひ入いり嫌きらひ入いり思おもひ入いり身みの内うちの不ふ淨じやう  
 をまむと至いたりて愛あいする入いり倒たふす入いり甚しん疎そ也なり  
 ○扣くわく田でん海かいを皆みなかこむけり洗あらふま身みのけがまどいりてきこふ



身の内の不浄をすく観るくつらまり執心をさる事ふかき  
 ○花を見る道の布とりの古扱かりのいろよや。人まよふらん  
 見る布どの入ふを迷ふ。何の荷入の世話入るあらしぬ女ふ  
 何をうごかす妖まろ下ごごと。こけちから頼む。女の方で不用を  
 まろく何處の馬の骨をあぬ人老やから物あまのふまいと男ふて  
 居るふ此方から女を知りて。あまろくある道をどちへ行ますと尋  
 祇とり。こけの川のうまの杯のうく相ふふふりのがる。柱人のといふべし  
 ○京名所圖會三ふ昔一清閑寺ふ真慈僧都とのふあり。あらしぬ  
 暮ふ門外たくホて行かへ入をえのろる。髪形ちめて言こ  
 女一入ぬくをえろく忽ち愛を起しせめろく物をもいひたき

と思へせ。いひかくべき使りあらくて清水へ行道の川をきこと。  
 向けまをかの女直入る可をよむのろふたく迷ふのをうまりて  
 歌の道入るでまるべきと誅まろく觀音大士と現トこりあらまらふ  
 僧都ハあらく禁豆まろく彌く修行まろく大德とあらまらへり  
 其所を歌の中山とのふ。清水寺と清閑寺との間みあり。上代の  
 大徳すろろんある形ちをえろく入をを迷ふらまらぬ。况や無智  
 又盲ある若ひ者女ハあまり無理もあし併しあかる何の役も  
 も立ぬたらま言也。是も在人ありたしあむべし。實入女も知るも  
 せぬ入ふよの女老やと思えせろく妖たがる。又男も氣もあらぬ  
 女ハ化こまたがら。凡そふと思ふ鬼へ化こまらとするからまろく。







正持小町のやうな妻を置く。弘明捕まうな智慧が所川く。  
 五六百年も生かすといふ欲ごうまき。人の心の常也といへり。一切  
 の人が皆かやうな願ひ也。こんふうまの事、天上の真中へ往て  
 もあり。唐の横丁へまの川くもあし。是れ此表やまの事であらう。  
 極楽や自由自在の國の咄也。

○又三馬がらふ入。何れも大きき願ひのあいか。ごうの金をまきと  
 ばま捨ひく。一夜の中、大か限者とふり。地面角屋敷をいらく  
 も買らんぐ。そして色男のわごととせけえく。あつた女みか  
 ぶのいかにまき。酒まのんだり。看らんぐ。遊びたい所へ遊びに行  
 此世のわらんかごりかまき。居て栄やう栄花がまき。いらくはあふ。

ことごとくの願ひの叶ひそふ物ごとし。此位の願ひの叶ひそ  
 ふ物ごとし。何のたまたごとし。三馬の大だまけめ。よふあ、いれそ  
 ふ事、まのいひ出く。悲まふく。天子將軍様ぐも叶まぬ  
 事也。金をまき。拾ひく。一夜の中、大福長者とふり。地  
 而株家督を買とる。とわくも。榮曜榮花をまき。此世  
 のあつたかごり生く居りた。是位の願ひの叶ひそふ者、  
 何のたまた事。何野を押しとんふ音か出る。不届千万世の中の  
 人を途じせる悪人也。予三馬も出合ふを、一棒も打殺す。狗  
 子大奥せしめんと。いかれく。いれまき。三馬の心を能く考へ  
 する。是れ世の中の人か皆かやうな無理な願ひをするなふ。



夫を志る者也。かやうの願ひをする者も、  
皆大だるけふ志る。世にやむるふき事也。是れ三馬が前  
の身引かけ。世中の強欲者を諍りける詞あり。世界  
中の人が、金銀の涌生る家業のつとめず志る。無理無体か山  
事なかり志る。強欲をかやうかやう。終入の大災ひを引出  
しえより、あつ處の福德追失ひ。一家一門の取を、あつ自  
入のこともかやう。両ふぬまつ。古挽右む。その身の上とふ  
る笑止千力とりの。金銀を志ること、ひろひる。一夜の内ふ  
大福長者とある。採の誰もすきふ志。左様入る。かやう者  
ふ。何でもかやう。治め家業を、精致。律、正直

みす。左を志る。福德安ん。其物も、着物も、其内ふ。り  
とあるべし。若此外の道を通ると、直借金のふちへ。まきり。  
四百四病の煩ひ。貪り。つらき物。あつ。大疫病。来るべし。  
落徳集ふ。惣。自然の道理を用ひ。し。  
大功の出来ぬ者也。事の印をい。若。皆。小人の好む  
所。宜。か。む。自然の道理を用ひ。む。大功の成就。志。鬼角。身を。治め。  
家業を。精。第一の實と志る。一生を送るべし。是聖人  
智者の通り。道の也。無理無性。金銀を。酒宴。遊。真  
を樂。と思ふ。皆。愚人也。大智清淨の君子。好ま。處

任能心得二編下  
三九



ふり。君子の貪らざるを以て寶とす。仁義禮智信を行ふを以て寶とす。君子の金玉を以て寶とせず。忠信を以て寶とす。土地を求めず。仁義を以て土地と為し。あり。大學のいよく楚國の寶を以て寶とせず。惟善を以て寶と為し。君子の貪らざるを以て寶と為し。深くあるべし。寛仁大度の心を養ふあり。仁義忠信家業出精の善を行ふ。善は八紘に在り。福德安んず。仁義忠信家業出精の根本也。福德の根本は八紘に在り。其末の吉凶禍福は天のまじりてせしむる也。是智者の善を善行也。

○年殆富久喜多留との草紙。深川木場の枝木の上より

在する男あり。又向ふの加ふても年の頃四十計りの男一を不亂に引竿を下し。釜をえ。究く居る處。一本のうけみあり。そのかみを引上るとす。何う引か。川に。その上へ。大いみこまりたる換子みえへ。かきく。と糸をたぐりて。引上り。えを金賊布也。彼者中へ。をいさ。重そのへ。取ま。上。押。其。何くへ。帰。サ。大。川。よ。事。一。基。仕。合。者。也。い。や。く。方。も。こ。も。一。基。思。ひ。橋。を。渡。り。













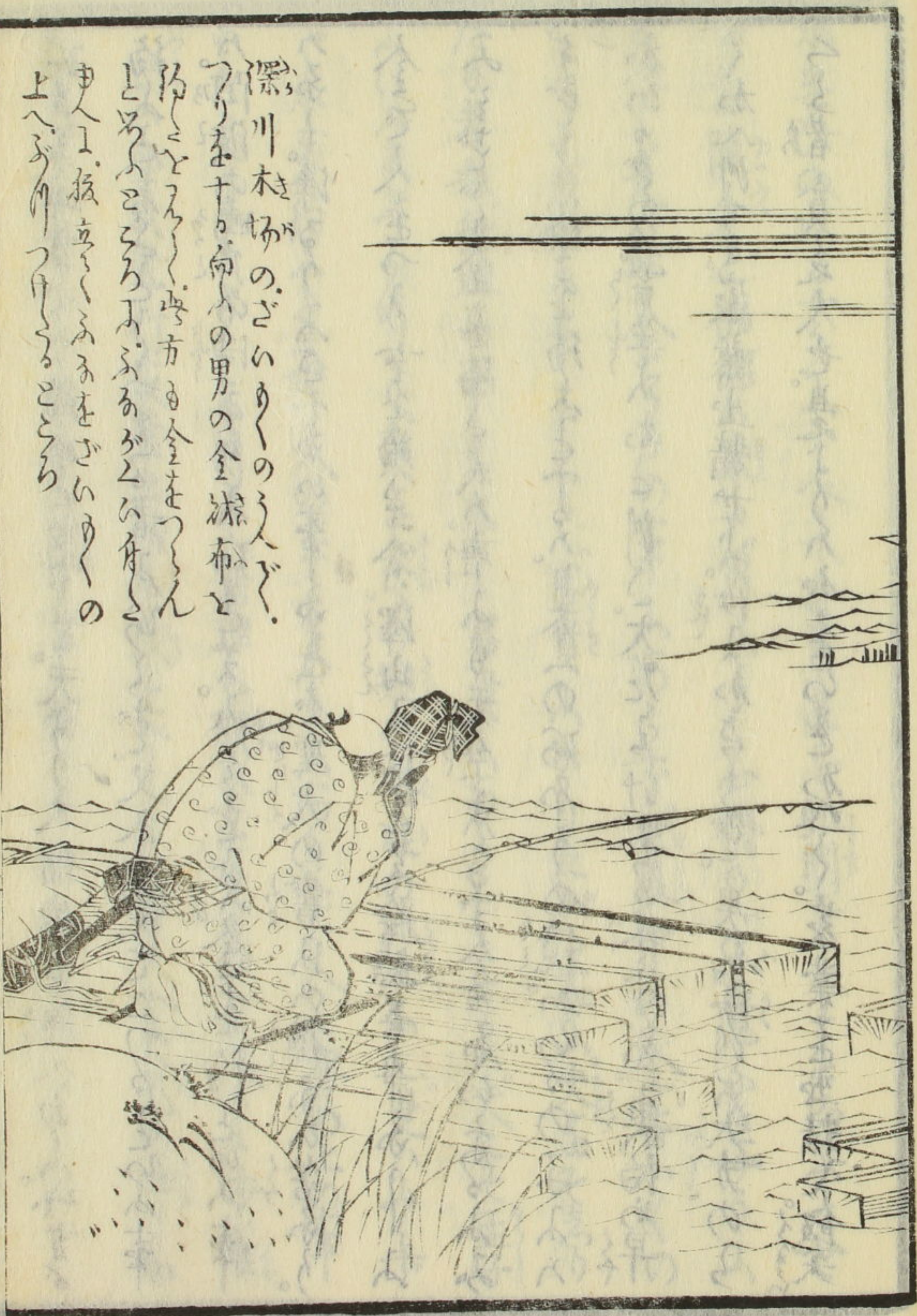
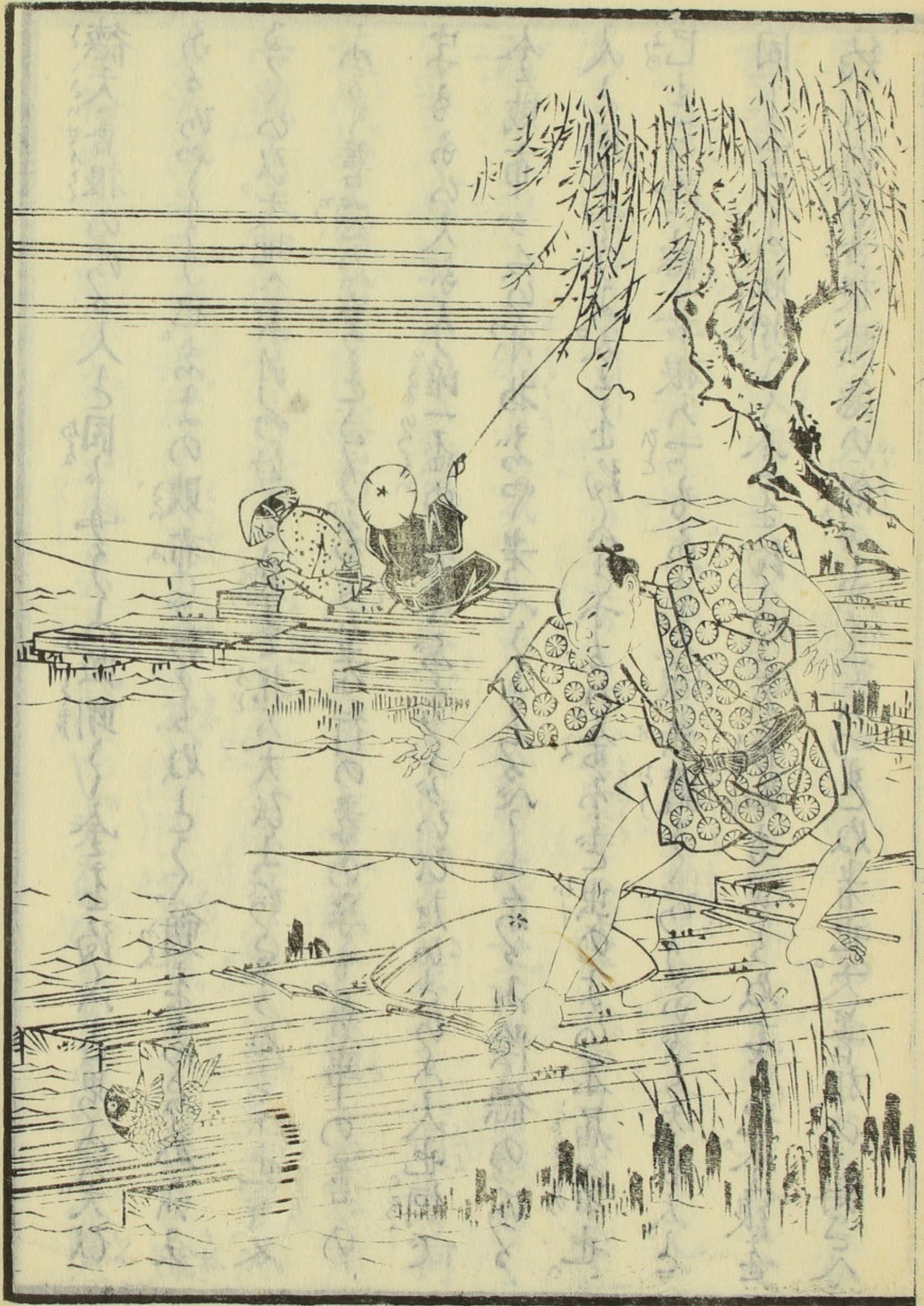


三行の行三  
一四三  
一。世間をふるふ大方の人か我子ふのよい物をきせりま  
物をたべせり。父母へかふるい物を著せし。ふい物をまらせ  
置人かまの世の中也。又年寄の親を納戸の角へかきこ  
あく人もあり。至りて。是等の事ハ。あきかうふ  
。ある。此郭巨ハ我子ふのよい物をきせ。ふい物を  
せり。母取ふのよい物をきせ。まの物を差上り。何  
。何。公をつけり。孝行を致す。は。は。は。我子を埋  
母親を大切にする。と。世ハ。希。ある。大孝行の人也。是ハ。誠  
出来が。き。事。也。天ハ。黄金の釜を授け。あ。善。也。ある。後  
の金。を。物。か。と。ま。と。男。ハ。よ。い。人。と。ハ。見。へ。か。じ。ま。を。い。う。ふ。と。い。ふ。陰

徳大善根のなる人と同じやうに蚯蚓は金を取ると思ふ大い  
あるやまうり也。まの敗布がわらぬとく。鮒をまらうか  
るくいひ。大地へぶつつけ。殺ま。大ひよ。う。う。ぬ。事。也。是  
。ハ。善。惡。ハ。う。う。と。り。ハ。孝。行。の。孝。の。字。も。善。事。の。善。の  
字。も。あ。い。人。ふ。り。唯。一。盃。の。ん。ぐ。ぶ。う。う。が。い。ひ。た。い。と。い。ふ。人。也。何。で  
金。敗。布。が。ら。い。物。お。や。考。へ。う。る。べ。し。ある。陰。徳。の。あ。る  
人。と。同。じ。や。う。に。金。を。取。る。と。す。ら。余。布。ど。虫。の。よ。い。不。届。者。也。  
己。ハ。陰。徳。善。根。ハ。も。あ。く。大。惡。無。道。と。り。あ。ら。大。善。人。と  
同。じ。や。う。に。蚯蚓。は。金。を。取。る。と。い。存。知。も。よ。う。ぬ。事。也。金。銀。を  
取。る。大。善。根。陰。徳。の。餌。と。い。う。て。い。つ。と。ぬ。者。也。大。善。根。の。餌。と。い

三行の行三  
一四三





際川村のどのいりくの人ど、  
 つりをする向人の男の全漆布と  
 路とをすく、此方も全漆布と  
 し、男とさるるふふあかといふ  
 申人、板立くふふをさといりく  
 上へふりつけるところ







○りつづみ月目をだふも。おろろすバ福德安公。此上ハあー  
 たる書みいそく。釜ハ舖と同ト字ふく量の事ありといへり。た  
 とへ量ふもせよ。釜ふもせよ。余不どの黄金也。世間づくよき  
 幸ひのあるを。釜をとりだーこといへむ。やちり釜ふくおろく  
 かよろろーかろん

○女中奉公の教へハ澤山入のまを。未だあること。紙敷の都合み  
 よのりく。爰ふ少くあるも。大坂京橋通りハ軒家両替高賣。米屋  
 何某の召仕ひ下女うこと者。兵庫磯の町石屋何某のむすめ也。  
 寛政二成年十月うこ。廿四歳入相成の時。祖母ふ川み送りいぬ  
 あり。是をまろーく。下女半女のを得ふす。登ー

一 庄主人様方のうすり。親よりも大いりみは。侍少ーも。藤末の  
 公ふく。なきを大切ふつとめてり事  
 一 庄主人様方のうすり。及をすは。不ろむい。鼠の。控又何  
 事ーふよろむ。どんとかげを。する事  
 一 何不と後立り。ひりた。堪忍を。あろく。かーもふ。あろ。あろ。顔  
 へら。こと。る。事  
 一 女ハ。あら。き。が。う。く。は。後。学。く。を。が。け。立。居。る。ま。い。者。ど。や  
 小豊。の。へ。り。あ。右。ふ。ど。ふ。ま。ぬ。や。う。み。が。け。ひ。ろ。く。く。表。き。物  
 い。ひ。き。笑。ひ。ふ。ど。と。世。用。の。事  
 一 田方。たる。人。く。み。ふ。ま。ろ。く。あ。物。い。ひ。は。ま。と。る。ま。い。は。又。あ。き。さ。女。の











者之舟。割菜芸。請人よみ立どりの辛より胡麻の大根迄中年九  
 年母入相極め法奉公入大角豆中。但し法給金梨子小致し。  
 うどの四季せ。茄子帷子冬木綿木の子可下下  
 一守あうぎ様御法度の。不う風事致させ申鋪は若菓物くい処  
 欠落仕ん。甚敷を改め代物も。又ハ青物ふても取之指上て  
 中。且又香の物も秘さひきん而も法氣入長いも入石仕以下  
 ことひく。まうび請人入相立可中奉一  
 一宗旨代蓮根宗も。擬寺地中人參院且那入務毎座座  
 若横合より。御法度の。わうまん草とや者有るぬ。且那寺牛  
 房口連也下方追也。出せうが。急度やまけざ仕り。貴屋八

取)も黒豆うけ申鋪は為後日以かうたん仍而如件

桃栗三年柿八月 請人青物町茗荷屋たて右衛門店 志と吉

人主神田土物店豆腐屋麩右衛門店 かんひか入

主人朝倉山并主人殿

或人のいまく娘を奉公出せ(人)このふをわきうつし。  
 是をよはめ御奉公を大切に相勤め様小致したきりのありと  
 いへり。又此巻の輕口まくと。三編の奉公の秘事口傳ふと深  
 し。人くを得むんを有べうも。又此本の所くみ女のらせをいひ惡と  
 いひたる。女のを得みせんが為也。又男の執をを除かんが為也。又男が  
 不持故み女のまうくある事もひり。男の悪性まうくまの事ハ主従



主從心得二編下

四編を見とるる

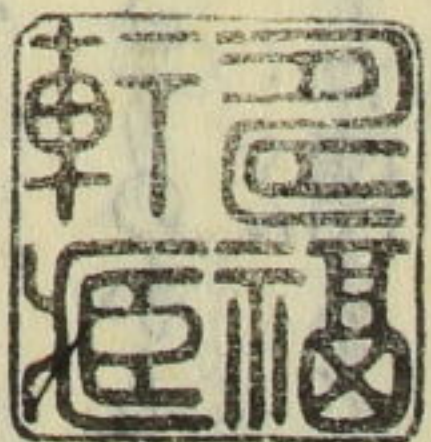
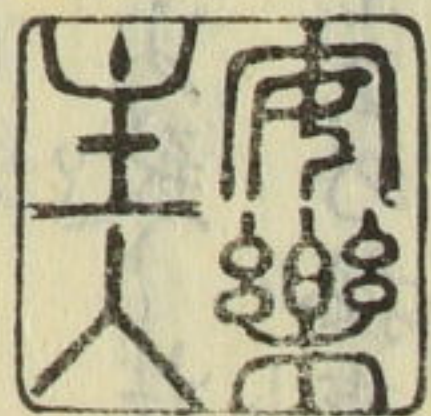
主從心得草後編 大尾

天保十四卯年七月天裁日

東都下谷金杉

安樂寺

真鏡著



日用心法鈔初篇 三冊

同二編 同三編 出板

主從心得草初篇 二冊

同二編 同三編 同

同四編 同五編 出板

日本橋通貳丁目

山城屋佐兵衛

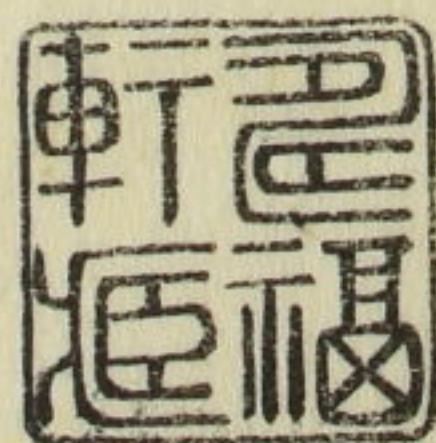
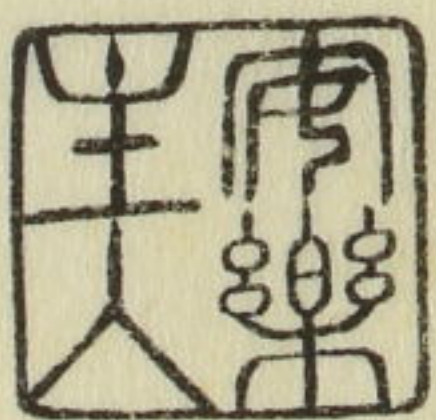
下谷車坂

和泉屋仁三郎

弘化四未歲正月吉祥日

東京下谷金杉

安樂精舎主述



# 書林

東京日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛





